

日本語教育と異文化伝道 ①

日本語教育での学習指導要領

ずっと以前の話だが、会議で日本語科の教員はいつも授業準備で忙しいとか教案作成で残業が多いと言われたことがある。日本語を教えることに専念して、天理教海外部全体の業務、あるいは行事の手伝い、当番などに非協力的だと思われていたのかもしれない。しかし、次の日の授業までに準備を済ませておかないと、授業中に混乱するのは本人や学生である。1人の教員が授業に出ている間に他の教員が次の授業の準備をするのであるが、教える項目について参考図書などを丹念に調べ、短時間の導入で理解させ、たくさん練習できるように知恵を絞らなければならない。そのため、限られた勤務時間内で終われないことも多い。それで勤め始めて3年目位までは残業続きということにもなるのだが、なかなか理解が得られなかったようだ。「いったいいつまで教案を書かなければならないのか。何とかできないものか」、「中学・高校のように文科省の学習指導要領のように、それに従って授業を進めていけばいいのではないか」とも言われた。しかし、日本語教育では文科省からの学習指導要領が明確にあるわけでもなく、多様化している日本語教育の世界では個々の日本教育機関に統一した指針を示すのも難しい。何とかできないものかという思いだけがいつも頭にあった。

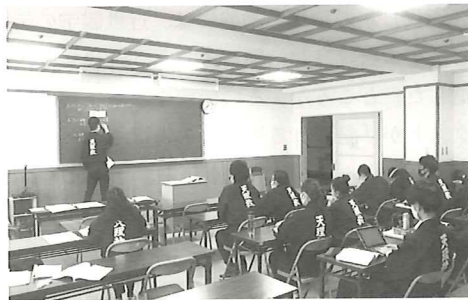
参考教案

標準的な教案があり、それを元に新人教員が授業準備を進めれば確かに時間の節約になり、教授面でも教えこぼしなども防いで、大きなメリットがあると言える。筆者の学校では新人教師の育成、天理大学の日本語教員養成課程の教育実習、あるいは海外の拠点で行われている日本語学校・日本語教室へ派遣される研修生向けに、限られた時間の中で教案準備ができるようにベテランの教師が中心になって参考教案を作成した。これはスリーエーネットワークから市販されている教案集で有馬俊子『日本語の教え方の秘訣』(上下2巻)という本を参考に作成したものである。この教案書は、海外技術者研修協会で技術研修生の日本語学習用に開発された『新日本語の基礎』という教科書に準拠したものであるが、その後、一般の日本語学習者向けに開発された『みんなの日本語』とは扱っている語彙にも違いがあり、天理教語学院で新たに『みんなの日本語』に準拠した形で作成した。

現実には甘くない

出来上がった参考教案であるが、これさえあれば授業がうまくできるというものではない。あくまで「参考教案」である。これも以前の話だが、海外拠点の日本語教室に派遣される研修生の模擬授業で、担当する課の参考教案を配布し、これをもとに自分で授業を組み立て、他の研修生は学生役になり模擬授業を行った。ある研修生は何度も読み込んでシミュレーションし、自分で考えて加筆や修正を行い、あるいは実際に話すセリフまで書き込んでいたが、書いてある通りにすればいいのだと特に準備もせずに教壇へ上がった研修生もいた。結果は言わずもがなだが、後者の研修生はただ参考教案に書かれてある内容を読むだけで、後で振り返りをしている時に、他の研修生から「わかりにくかった」、「何をすればいいのか指示もわからなかった」

などと厳しい指摘を受けていた。つまり書かれていることをそのまま読むのではなく、教員が実際に教室内で発話するセリフ、あるいはジェス



青年会・婦人会海外人材派遣生の模擬授業の様子

チャーや細かい指示などを自分の言葉で補わなければ、実際の教壇には立てないのである。経験豊富な教員であれば、そういった部分は、わざわざ書く必要もなければ教授項目を見れば、「リピートしてください」とか「では、練習しましょう」などの教室用語も自然に出て、授業は円滑に流れていく。さらに個々の教員の個性も加わって、参考教案の導入例だけでなく、さらに工夫した導入で、学習者を飽きさせない楽しい授業を作り出せるのかとも思う。言い換えれば、料理人のような職人の世界の話であり、参考教案は標準的なレシピのようなものである。

教員の熟達化

授業準備の助けにもなり、新人教師の育成にも活用している参考教案であるが、課題もある。筆者は熟達化が教員養成においても重要であると考えているが、勤務する学校での熟達化過程を次のように考えている。

初級者：3年位までで教科書の全ての項目を一通り経験

中級者：海外勤務も含めて5～7年目で、主体的に判断ができる

上級者：8年以上の経験があり、初級から上級まで幅広く対応でき、担任としてクラスを運営できる

熟達者：10年以上の経験と教育に関する幅広い知識と知識を創造する知恵を備えた者

一般的に初級者はマニュアルにある情報を模倣したり、先輩の指示どおりに従って課題を遂行する。つまりマニュアル化された教授項目を授業の中で一通り行うことができるレベルと言える。問題はこの初級者の段階で「初級者の幸福」(一通りのことのできるようになり、それだけで十分幸福を感じる)を味わい、成長が止まってしまうことである。マニュアル化された参考教案の落とし穴とも言える。初級者から段階を追って熟達化していくことが望ましいが、そのためには次に述べる徒弟制が重要である。徒弟制とは親方や師匠が弟子に手伝わせながら様々な技能を習得していくことであるが、日本語教師の養成においてもこれは重要である。なぜなら学習の場である実践の場で一定の役割を果たしつつ、新人が部分的な仕事に携わりながら全体の仕事の流れを学んでいくことで、大きな学習効果をあげることができるからである。また仮に初級者が失敗をしたとしても、それが決定的な失敗にならないように指導者はコントロールすることができる。

[参考文献]

波多野諄余夫・永野重史・大浦容子『教授・学習過程論—学習の総合科学を目指して—』第6章「熟達化」放送大学大学院教材、2004年、69～78頁。